

革命的情勢 その2

革命的情勢なしには、革命は不可能であり、しかも、どんな革命的情勢でも革命をもたらすとはかぎらないということは、マルクス主義者にとっては疑う余地がない。一般的に言って、革命的情勢の徴候とは、どんなものであろうか？ つぎの三つの主要な徴候をあげれば、たしかにまちがいではないだろう。(一) 支配階級にとっては、いままでどおりの形で、その支配を維持することが不可能なこと。「上層」のあれこれの危機、支配階級の政策の危機が、割れ目をつくりだし、そこから、被抑圧階級の不満と激昂がやぶれ出ること。革命が到来するには、通常、「下層」がこれまでどおりに生活することを「のぞまない」だけではたりない。さらに、「上層」が、これまでどおりに生活していくことが「できない」ことが必要である。(二) 被抑圧階級の欠乏と困窮が普通以上に激化すること。

(三) 右の諸原因によって、大衆の活動性がいちじるしくたかまること。大衆は、「平和」の時代にはおとなしく略奪されるままになっているが、あらしの時代には、危機の環境全体によっても、また「上層」そのものによっても、自主的な歴史的行動に引きいれられる。

個々のグループや党の意志ばかりでなく、個々の階級の意志とも無関係な、これらの客観的な変化がなければ、革命は——通例——不可能である。これらの客観的な変化の総体が、革命的情勢と呼ばれるのである。こういう情勢は、ロシアでは 1905 年に、西欧ではすべての革命期に存在していた。しかし、それはドイツでは前世紀の六〇年代にも、ロシアでは 1859～1861 年 1879～1880 年にも存在していた。もっとも、これらのばあいには、革命はおこらなかったけれども。それはなぜか？ すべての革命的情勢から革命がおこるとはかぎらず、以上に列挙した客観的な変化に主体的な変化がくわわるばあい、すなわち、旧来の政府をうちくたく（またはゆるがす）にたりるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力がくわわるような情勢からだけ革命がおこるからである。旧来の政府は、それを「たおさ」ないかぎり、たとえ危機の時代であろうと、けっしてひとりで「たおれる」ものではない。

第 21 卷 P208~209 『第二インタナショナルの崩壊』

1915 年 5 月後半～6 月前半に執筆

コメント

革命的情勢なしには、革命は不可能であり、しかも、どんな革命的情勢でも革命をもたらすとはかぎらないということは、マルクス主義者にとっては疑う余地がない。

つまり、すべての革命的情勢から革命がおこるとはかぎらず、これらの客観的な変化に主体的な変化がくわわるばあい、すなわち、旧来の政府をうちくたくにたりるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力がくわわるような情勢からだけ革命がおこるのである。旧来の政府は、それを「たおさ」ないかぎり、たとえ危機の時代であろうと、けっしてひとりで「たおれる」ものではない。

だから、by the people の力の形成に精力的に取り組まなければならない。